

早稲田大学インクルーシブ教育学会 ニュースレター

2024 年（令和 6 年度）11 月

田中康雄先生のご紹介

副会長の高橋先生よりご紹介です。

「こころとそだちのクリニックむすびめ 院長」であり、シンポジウムや著書でも沢山のご業績をお持ちの田中先生。そこで語られる内容からは、地域・教育機関との関わりや“ひと”を大切にする田中先生の真摯な姿と 생각이伝わってきます。本日は、その田中先生の言葉を受けて自分を振り返り、子どもたちとどう向き合うのか考える機会にしたいと思います。

発達障害傾向が垣間見える子の 思春期を支える大人の関わりの困難性

発達障害であるがゆえの行きずらさ

－思春期以前の視点から－

まずは、発達障害傾向がある子どものライフステージを思春期以前と思春期以降に分けて外観することが重要です。思春期以前の子どもは、生まれてからずっと、“どうしてうまくいかないのだろうか？”と悩んでいる。この視点に立つと、診断がつくかということよりもその子どもにどんな声かけをしたらこの子が安心するのだろうか？を考えることの方が大事だと考えています。また、安心を手に入れてないことで後天的な発達障害傾向が見られる場合があり、子どもたちと関わる際には、この点と与件しておく必要もあります。

小学校に入ると、学習場面においても他者との関わりが上手にできないことで、自分に自信を持てず、やる気が出ず、学習から撤退していくことがあります。学校は学習の場であると同時に“サロン”的な役割を担っています。対人スキルを持っていれば“サロン”という場を楽しめますが、そうでない場合には学校から足が遠のいていきます。こうして、学習面の遅れと共に、学校が光の見えない場になっていくのです。

－思春期以後の視点から－

この時期、大きな変化としてあげられるのは“身体”と“親との距離”です。物理的には親の側にいて経済的にも支援してもらいながら、精神的には離れなければいけないという矛盾した状況の中で、彼らは親離れへの挑戦をします。このような精神的なアンバランスを抱えるとき、支えになるのが“親密な友人”です。発達障害傾向のある子どもや対人関係を上手く作れない子どもは、こうした親密関係を築けず「孤独から孤立」へつながっている可能性があります。孤独になってまで親から離れるのかという葛藤の中で、二次的な障害が発現しやすいといえます。

－二次的な障害－

二次的障害とは、「大人になることへの不安と子どもでいることのへの不全感、自分をどうコントロールしていいかわからないという調整能力のつまずき」と考えています。思い悩みながらも友人や教師とのつながりの中で光が見えた経験は、発達障害に関わらず誰も経験しているもの。そして、この光が見えないときに二次的な障害が出やすいのです。二次的な障害については、“誰も経験するもの”と捉える視点をもつと共に、外的環境として挙げられる「深刻な養育状況」「虐待」等あってはならないものについては、私たちはそこに立ち戻って彼らの痛みを想像しながら向き合わなければならないと考えています。

思春期の子どもを抱える親について

親は戸惑い、蓋をしたい、後退り、八つ当たり、申し訳なさがあります。そして、親も我が子との子離れについて葛藤を抱えています。発達障害傾向のある子どもの診察に関しては、親御さんとの共同治療をベースにしていますが、複雑な家庭が増える現代においては、保護者に対しても支援が必要な場合があります。つまり、親は親としてではなく、個人的なクライアントとして向き合うことが、時として必要になるわけです。

また、親自身が自分の育ちを振り返り、自身の辛い経験やそこから生まれる不安全感を見るとき、親自身が「第二の思春期」をむかえていることもあります。そんなとき、子どもも自分も“成長することができる”という自信を、親が取り戻せるような関わりが重要になってきます。

子どもたちとの関わりの中で

最後に、この時期に発現しやすい症状の見極めと、子どもたちとご自身の向き合いについてお話しいたしました。

ー思春期という時期を生きる子どもたちー

現実社会の一員として成長していくためには「モデリング」の存在が必要です。“あなたのような大人になりたい”という思いを思春期の子どもたちに伝えていくことが大切です。漠然とした身体不調や言語表現など、思春期の繊細な感覚に気づくことができないくらい成長してしまった大人の一人として、その申し訳なさを伝えつつも、説得や言いくるめではなく“どうしたら思いが伝わるのか”を胸に子どもたちと向き合っています。

ー田中先生の思いー

診断名をつけるタイミングやそこで話すことも診察の重要なプロセスです。大切なことは、その人が困っていることにどう寄り添い共に考えるかでしょう。一方で、自分の人生をカモフラージュして生きてきた彼らが主体的、自律的に相談関係を樹立するのは難しいことでもあります。そうした中で、彼らにとっての一人の相談者として“自分探しのお手伝い”ができるよう、言葉を磨いていきたいと考えています。

グループセッション

後半のグループセッションでは、①田中先生のご講演で一番印象に残っていること、②発達障害の子どもを支援していて困っていること・難しく思うこと、③田中先生にお伺いしたいこと、この3つの視点で議論を進めました。以下、グループで出た内容です。

★1～2は、田中先生にご回答いただいた項目です。（紙面の関係上一部のご紹介となっております）

①一番印象に残っていること	②困っていること・難しく思うこと
・わかってほしいけれどすべてを知られたくないというのが思春期 ・過ぎ去った親の“思春期”に思いを寄せ、子どもの目線に寄せる ・複雑な世の中に対してどう向き合っていくのか真摯に向き合っている田中先生の姿 ・自己否定からくる性別違和感 ・親の「忘れ物」、保護者も“第二の思春期”に向き合っている ・学校はサロンの役割も担っている	・教員の立場から「勉強しなくてもいい」「学校に来なくてもいい」とはいづらい ・専門機関につなげることの難しさ ・教員の生徒理解と保護者の期待とのズレ ・「発達障害」の診断名がついていることによって、本当の原因がぼやけてしまう
お伺いしたいこと	
・学校の教員の適切な医療へ繋げ方について（★1） ・卑猥な言葉を投げってしまう生徒に対して、どのように伝えたいのか ・自身をカモフラージュしてしまい、子どもたちの本当の気持ちを聞き取ることができない ・効果的な引き継ぎ（★2）	

（★1）医療というよりは「人と繋げる」という気持ちでいると良い。医療が教育の邪魔をしてはいけないと考えている。

（★2）できたこととできなかったことを具体的にし、関わっている大人が“正直な”引き継ぎをしていくことが大事。しかし、高校卒業後の引き継ぎは医療の出番。ここは地域の力が重要となってくる。

----- ご参加の皆さまからの感想 -----

- ・二次障害を防ぐのではなく、誰にでも生じるものと捉える視点が新鮮でした。
- ・子どもが今できていることを褒めて関係を築くということに、改めて目を見開かされました。
- ・発達障害の特性による「困り感」は、生まれつきの特性に起因しているにもかかわらず、それが「個人の落ち度」として扱われがちであることについて考えさせられました。